

播種準備



写真③ 苗立枯病

播種に当たっては、使用する培養土や床土を消毒し、苗立枯病やつる枯病の対策をしましょう(表③参照)。また、使い古した資材は病気の発生を助長する恐れがあるため、苗床に敷いたり苗を

令和7年産の振り返り

令和7年産は、播種時期や3月の低温、定植期における気温の乱高下など、スイカにとってストレスとなる要素が多い年でした。そのため、苗の段階で苗立枯病(写真③)の病気や温度・湿度不足による生育のバラつきが見られました。今回は、管内で作付けの多い半促成作における育苗期から定植までの栽培管理のポイントをいま一度確認しましょう。

病害虫対策

ナスで多く見られるのは、アザミウマ類による食害です(写真①)。被害の特徴として果実や花にカスリ状の傷が生じ、葉には2〜3ミリの細長い白色または褐色の斑点が生じます。対策としては、害虫の多発前から薬剤による早期防除を行う必要があります(表②参照)。

他にもコナジラミ類、アブラムシ類、ハダニ類等にも注意が必要です。また、薬剤防除のローテーション散布の中に、気門封鎖剤を取り入れることによって、さらなる防除効果が期待できます(表②参照)。

これらの農薬の効果を十分に発揮させるためには、あらかじめ目合いの細かい防虫ネットで微少害虫の侵入を防ぐこと、適切な濃度で希釈して使用すること、病害虫の発生初期に散布することが重要です。

また、害虫被害を最小限に抑えるためには、ハウス内や周辺の除草作業を行う等、「外から入れない」「中で増やさない」「外

ヤケ果対策



写真① アザミウマ食害(果実)

ヤケ果(写真②)は、果皮が柔らかい状態で直射日光を受けたり、ハウス内の高温等によって発生しやすくなります。鉄骨の大型ハウスは保温性・保湿性が高く、果皮が柔らかくなりやすい傾向があるので注意が必要です。特に、低温期から季節が移り変わる4〜5月にかけて、発生が最も多くなります。

対策① 定植後の樹勢次第では、1〜2番果を摘果し、株づくりに専念する。

対策② 最低気温が10℃以上になる場合は、夕方のハウス換気は閉めない。特に桜の開花期

へ出さない「次作へつながらない」という予防的な対策と、伝染経路を断つことを心掛けましょう。

播種

覆つたりする資材は、新品またはきれいなものを使用してください。床土は厚さ5センチ程度を目安とし、播種床は電熱線等を用いて地温28℃前後に温めましょう。

接ぎ木

灌水は播種前日に行い、水分を均一にしましょう。育苗箱1箱に対して150〜200粒を散布し、覆土は5〜10センチ程度にします。播種時期の目安は、台木が12月下旬〜1月中旬、穂木が1月上旬〜中旬です。台木は穂木より5〜7日早く播きましょう。

発芽後は、地温を日中25〜30℃に保ちながら、最低地温を15℃程度まで徐々に下げます。台木は本葉0.7〜1枚、穂木は子葉が完全展開したところに、断根挿し接ぎをしましょう。

接ぎ木後は、事前に温めた挿し床に挿して2〜3日間密閉して湿度を100%に保ち、直射日光は避けましょう。その後は徐々に日光に当て、活着したら

鉢上げ

遮光資材を外して少しずつ換気してください。

接ぎ木後14日経過したところに、温めておいた鉢土を用いて9センチポットに鉢上げします。定植前には「ずらし」を行い、日光に十分に当て、本葉5枚目が展開した段階で摘芯しましょう。

定植準備・定植

定植前に本圃の土壤消毒を行い、ホモプシス根腐病やセンチュウ類を防除しましょう(表③参照)。その後、適切な施肥を行い、地温を確保するため定植10日前までにベッド作りを済ませましょう。ベッドは床幅200センチを基準とし、十分に灌水してから透明またはグリーンのマルチを敷きます。厚さ0.075ミリのビニールを用いてトンネルを設置しましょう。

準備が整ったら、2月中下旬の晴天で暖かい日を選び、浅植えて定植し、不織布等で覆いましょう。

表③ 苗立枯病・つる枯病に登録のある薬剤

薬剤名	対象病害虫	使用量・希釈倍数	使用時期	使用回数
オーソサイド水和剤80	苗立枯病	800倍(2L/m ² 灌注)	播種後から2〜3葉期まで	5回以内
	つる枯病	600倍(散布)	収穫14日前まで	
ペンコゼブフロアブル	つる枯病	600倍(散布)	収穫7日前まで	7回以内
DC油剤	ネグサレセンチュウ、ネコブセンチュウ	15〜20L/10a(1.5〜2mL/1穴)	作付10〜15日前まで	1回
ドロクロール	センチュウ類、ホモプシス根腐病	3mL/1穴	下記(※)を参照	圃場1回以内
ネマキック粒剤	ネコブセンチュウ	15〜20kg/10a	定植前	1回
ネマトリンエース粒剤		15〜20kg/10a	定植前	1回

(※)注入部位を直ちに覆土し、地表面をポリエチレンやビニール等で被覆すること。地温が15℃以上の場合は処理後10日ほどで、地温が低い場合は処理後20〜30日経過するとガスは大体抜けますが、念のためくわを入れます。土質、気温等によってまだ臭気が残っている場合は、よく切り返して完全にガス抜きを行ってから、播種または移植すること。

表① アザミウマとコナジラミに登録のある薬剤

薬剤名	希釈倍率	使用時期	使用回数
スターフル顆粒水溶剤	2000倍	収穫前日まで	2回以内
モスピラン顆粒水溶剤	2000〜4000倍		3回以内
ディアナSC	2500〜5000倍		2回以内
アフーム乳剤	2000倍		2回以内
グレーシア乳剤	2000倍		2回以内
アベンジャーフロアブル	1000〜2000倍		3回以内

以降は日照時間が長く、密閉状態になると夜間のハウス内の気温・湿度がともに上昇し、果皮が柔らかくなりやすいため注意する。

摘葉を控えて果実を葉で覆い、直接日光を避ける方法についてはあまり効果が見られないとされており、ヤケ果の防止には、十分な換気によってハウス内の温度・湿度を下げる

表② 主な気門封鎖剤の種類

薬剤名	成分系統	主な特徴	対象害虫
サフオイル乳剤 サンクリスタル乳剤	油剤系 (調合油・脂肪酸グリセリド等)	油膜で気門を封鎖	ハダニ類 コナジラミ類 アブラムシ類
粘着くん液剤 エコピタ液剤	デンプン・多糖類	天然成分で包み込み動きを抑える	
フーモン ムシラップ	界面活性剤 (脂肪酸エステル等)	害虫の外皮を溶解し、気門を封鎖する	



写真② ヤケ果